

修士論文（要旨）
2014年1月

一般病院における身体拘束廃止のプロセス

指導 白澤政和 教授

老年学研究科
老年学専攻
212J6010
奈良由美

目次

I 研究目的	• • • • • 1
II 研究方法	• • • • • 1
III 結果	• • • • • 1

参考文献一覽

高齢者施設では、以前、身体拘束が当然のようにされていた。介護保険法により生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束の原則禁止の規定が厚生省（現厚生労働省）より発令された。『身体拘束ゼロへの手引き—高齢者ケアに関わるすべての人に—』¹⁾が出され、身体拘束廃止のためにさまざまな取り組みがされてきた。高齢者施設においては、高齢者の人権を守ることを認識し、身体拘束をしないケアがなされてきている。一方、病院においては、入院し積極的に治療を行う高齢者が増加したことで、せん妄や認知症など的高齢者に対して、安全確保や適切な治療のために身体拘束が行われている患者も増加している。病院は「治療の場」であり、治療を最優先に考え、安全を確保するためには「しかたがない」として身体拘束が行われている。しかし、高齢者の権利、人権を考えたとき、身体拘束は人権を侵害していることは明らかである

高齢者の人権が守られるためには、身体拘束を見直し、身体拘束をせずに行うケアを考える必要がある。

I. 研究目的

一般病院での身体拘束については、身体拘束に対する看護師の意識や身体拘束を行っている現状について明らかになったが、身体拘束を廃止するための方法は明らかになっていない。そこで、一般病院における身体拘束廃止のプロセスを明らかにすることで、一般病院での身体拘束を廃止するための要件を明らかにする。

その際の操作的定義として、身体拘束は、「身体拘束ゼロの手引き」で明示されている具体的行為では精神科病床で行われる隔離などが含まれるため、ここでは「患者の身体にひも等の用具を用いて、可動性を制限する行為」と狭義に定義することとする。

II. 研究方法

対象者は、身体拘束廃止への取り組みを行っている一般病院（法律により身体拘束禁止規定のある精神科病床、介護保険施設の療養病床を除く）において、「実際の患者への対応方法について理解しており、同時に組織の中で病院の方針に対しても関与している看護師」7名である。研究協力の同意が得られた看護師に、インタビューガイドをもとに半構成的面接法にて実施した。

本研究においては、一般病院における身体拘束廃止のプロセスを明らかにするため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach 以下 M-GTA とする）を用いて分析した。

III 結果

一般病院における身体拘束廃止のプロセスは、【身体拘束廃止の背景】があり、身体拘束廃止の契機となり始まる。そして、組織と現場のスタッフがそれぞれに【身体拘束廃止の準備】を進め、身体拘束の廃止に取り組む。身体拘束廃止マニュアルやケアの基本を見直すことで身体拘束を廃止していくが、その中で新たに出た【取り組み中の課題】に対しては、多職種の協力や身体拘束に関する委員会の支援、アセスメント力の向上により課題に対応している。身体拘束の取り組みを推進し継続するためには、病院経営者のリーダーシップが不可欠である。身体拘束の廃止は、スタッフへの効果、患者への効果があり、身体拘束廃止の効果がさらに身体拘束廃止への取り組みを推進させるというストーリーラインに至った。

参考文献一覧

- 1) 厚生労働省：身体拘束ゼロへの手引きー高齢者ケアに関わるすべての人にー、2001.
- 2) 義本純子：高齢者施設における身体拘束廃止に関する介護・看護職員の意識について、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要、40 (1)、121-122、2008.
- 3) 吉川悠貴他：本邦の介護保険施設における身体拘束の実施状況、老年社会科学、29 (3)、417、2007.
- 4) 中尾久子他：高齢者施設における身体拘束廃止の取り組みと事故に関する研究、九州大学医学部保健学科紀要、6、6、2005
- 5) 星野典子、中尾久子：高齢者の抑制廃止の取り組みに関する研究ー既に取り組んでいる施設の調査を通してー、山口県立大学看護学部紀要、8、72、2004.
- 6) 宗田紳一他：行動制限に関する医師・看護師間での認識の相違、第34回日本精神科看護学会誌、316、2009.
- 7) 吉川広子：精神科における身体拘束の看護ケアに対する看護者の意識調査、医療、57 (1)、45、2003.
- 8) 長谷川利夫『精神科医療の隔離・身体拘束』、日本評論社、70-74、2013.
- 9) 多久静香他：看護師の身体拘束に関する意識調査、中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌、3、2007.
- 10) 小河育恵、佐藤小百合、吉田早織：ICUにおける開心術後の患者の上肢抑制の検討、奈良県立医科大学看護学科紀要、1、28、2005.
- 11) 山本美輪：看護系経験年数による高齢者の身体的抑制に対する看護師のジレンマの差、日本看護管理学会誌、9 (1)、9-12、2005.
- 12) 草地仁史他：身体抑制時に抱く看護師の感情に関する研究ー勤務場所による看護師の感情の特徴一、第43回日本看護学会論文集 看護総合、198、2013.
- 13) 徳田裕子、田口沙耶香、伊藤嘉子：経管栄養チューブ自己抜去予防するための抑制具の見直し、日赤医学 63 (2)、399、2012.
- 14) 四宮圭美他：公立総合病院看護職の身体拘束の意識調査ー状況判断時のジレンマを中心に一、第36回看護総合、53、2005.
- 15) 田上しのぶ：倫理時代の抑制、看護技術、47 (7)、31、2001.
- 16) 城生弘美他：高齢者施設における「抑制」に関する海外文献の1991年から2000年までの動向、東京保健科学学会誌、5 (3)、134、2002.
- 17) 松尾香奈：一般病棟において看護師が体験した認知症高齢者への対応の困難さ、日本赤十字看護大学紀要、25、109、2011.
- 18) 谷本裕子他：急性期病棟における身体抑制適正化への試みー身体抑制基準・解除手順の導入一、医療マネジメント学会雑誌、6 (3)、566、2005.
- 19) 浦智章他：身体拘束の現状と職員の意識に関する現状、リハビリテーション連携科学、13 (2)、99、2012.
- 20) 梶原美帆他：身体拘束解除に対する「看護師の迷い」に関する研究、第43回日本看護学会論文集 看護総合、202、2013.
- 21) 竹腰雅江他：身体拘束解除フローチャートの妥当性の検討、第43回日本看護学会論文集 看護管理、14、2013.